

青春の記録 2 / 孤独なる渴望 / 模索と彷徨

青春の
記録
2

孤独なる渴望

||
模索と彷徨

三三書房

青春の記録 2 孤独なる渴望 編者 福田善之

一九六七年十月一日 第一版発行 定価 四六〇円

発行者 竹 村 一

印刷所 同興印刷株式会社

製本所 有限会社 佐伯製本所

株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(二九一)三一三一―五番

振替東京八四一六〇番

I 青春の先駆者たち

三日幻境

4

北村透谷

死刑囚の思い出

6

古田大次郎

何が私をこうさせたか

15

金子ふみ子

演劇自叙伝

47

千田是也

II 深き死の淵より

100

二十歳のエチュード

120

原口統三

十七歳の鎮魂曲^{レクイエム}

139

長沢延子

詩と反逆と死

153

大宅 歩

III 愛と革命の絶唱

178

血のメーデーの頃

180

崎野一馬

残さるべき死

200

茅野寛志

意志表示

222

岸上大作

青春の墓標

237

奥 浩平

解説

301

福田善之

コラム

自由民権運動と北村透谷	7
嶽頭の感 藤村 操	73
はてしなき議論の後 石川啄木	26
金子ふみ子の屍体発掘	90
初期詩篇 原口統三	129
挽 歌 長沢延子	146
ある小さな永遠の序奏のために 大宅 歩	162
人しれず微笑まん 樺美智子	212
6・15国会構内流血の証言	216
意志表示 岸上大作	226

青春の記録 2

孤独なる渴望

模索と彷徨

I 青春の先駆者たち

三日幻境

北村透谷

死刑囚の思い出

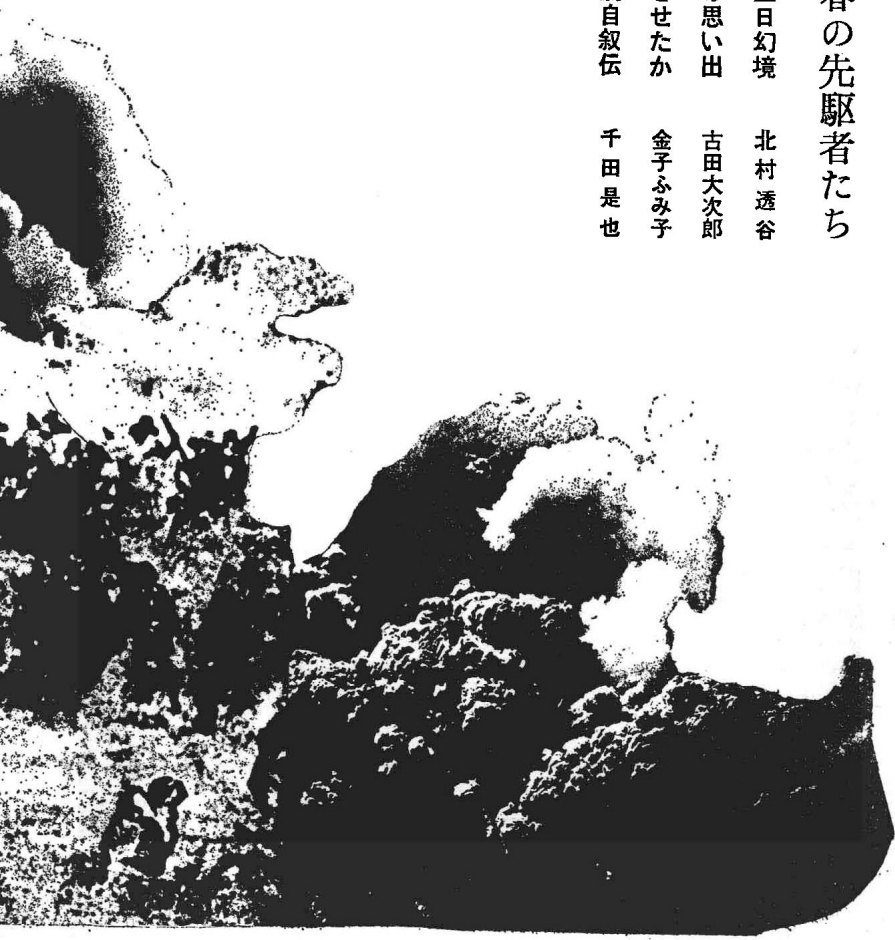
古田大次郎

何が私をこうさせたか

金子ふみ子

演劇自叙伝

千田是也





(上)

人生何すれぞ常に忙促(せわしいこと)たる、半生の過夢算(かぞ)うるに違(い)なし。悲しいかな、我もまた浮萍(うきくさ)を追ひ迷雲を尋ねて、この夕徒(ゆうた)らに往事を追懐するの身となれり。

常に惟(おも)う、志を行わん正するものは必らずしも終生を勞役するに及ばず。詩壇の正直男(ゴールドスミス)この情(こころ)を賦して言えることあり。

I still had hopes, my long vexation past,

Here to return—and die at home at last.

浮世に背(そむ)き微志(わいし)（わずかばかりのこころざし）を奮(ふる)えてより、世路酷(くる)だ峭巖(けわしいさま)、烈々たる炎暑(はげしい)、凄々(せひ)（つめたく寒いさま）たる冬日、いつはつべしとも知らぬ旅路の空をうち眺めて、屢(しばしば)正直男と共に故郷なつかしく袖を涙にひじしことあり。

われは函嶺(箱根の山)の東、山水の威靈少なからぬところに産れたれば、我が故郷はと問わばそこ答うるに躊躇(ためら)わねども、往時の産業(世わたりの仕事)は破れ、知己親縁の風流雲散せざるはなく、快く曠昔(あきふし)を語るべき古老の存するなし。山水もはた昔時に異なり

北村透谷は、明治元年小田原に生まれ、少年の日から自由民権運動に興味をいだき、三多摩地方の運動に身を投ずるが、明治十八年のいわゆる「大阪事件」に参加を求められたのを契機に、運動の内面に疑いの眼をひらいていき、独自の思想活動をつづけていくことになる。『三日幻境』は、彼が政治に対してまったく背をむけた時点で書かれたもので、過去の政治参加に対する苦い屈折した姿勢が読みとれる。明治二十六年「文学界」創立とともにその中心となり、文芸者として近代的自我の内面的確立をめざした。明治二十七年、縊死、日清戦争勃発の三ヵ月前だった。

て、豪族の擅横（せんごう）へかつて気ままにふるまうことをつらにくしとも思（おも）ひぬるなを垂（た）るるは、流石（りやうじ）に名山大川の威靈も半死（はんし）せしやと覚えて面白（おもしろ）からず。「追懷（しゆい）」のみはその地を我故郷（われこきやう）とうなずけど、「希望（きやうばう）」は我に他の故郷を強ゆる如し。

回顧すれば七歳のむかし、我が早稲田にありし頃（へん）（透谷は一八八三年九月、十四歳で早稲田大学の前身、東京専門学校の政治科に入学した、我を迷わせし一幻境ありけり、軽々しくも夙少（ふくせう）くして政海の知己を得つ、交りを当年（そのころ）、の意の健児に結びて、鬱勃（うよく）沈憂（しんゆう）のあまり月を弄し、花を折り、遂には書を抛げ筆を投じて、一二の同盟と共に世塵を避けて、一切物外の人とならんと企てき。今にして思えば政海の波浪は自（みづか）ら卑く、虚名を貪り俗情に耽（ひ）るるの人には棹（しやう）を役い、櫂（かい）を用ゆるのおもしろみあるべきも、わが如く一片の頑骨（がんこつ）（かたくなな性格）に動止を制し能わざるものの漂うべきところならず。然れども我は実にこの波浪に漂蕩（ひょうたう）して、悲憤慷慨（ひきふんかいがい）の壮士と共に我が血涙を絞りたりしなり。醜惡（しうご）なる社会を罵蹴（ののし）して一蹶（いつけつ）二度（ふた）つまずくこと。ここではひとたび思い立（た）つてくらの意（い）か）青山に入り、怪しげなる草廬（そうろ）を結びて、空しく俗骨（せうこつ）（世間一般の俗人）をして畸人の名に敬して心には遠ざけしめたるなり。この

●自由民権運動と北村透谷

明治維新につづく自由民権の国家的激動のなかに青春をすごした北村透谷は、自由民権運動が明治十七年の加波山蜂起の敗北を契機にして後退期に入るこの頃から、運動の敗北を自から鋭くうけとめ、その挫折感を文学に内面化していく道を進みはじめる。

明治十八年、自由党左派の大井憲太郎（おおいけんたろう）朝鮮独立運動に介入するため、資金調達を非法手段に訴えるが、透谷の親友・大矢蒼海も決死隊として強盗を計画し、透谷に参加を求めた。大井らの計画は結局発覚することになる（いわゆる「大阪事件」）が、たとえ「義挙」のためとはいえ強盗を手段にすることをうちあけられた透谷は、非常に苦しんだ末、「髪を剃り箆（へら）を曳いて」大矢の前にあらわれる。この変わりてた透谷の姿をみて、大矢もあえて参加を強要することはできなかった。——この事件を転回点として、運動の落伍者としての挫折感が深い傷痕として透谷をしぼり、数年間を苦闘のうちにすごすが、その後かつての自由民権の指導者が国家主義に流れていくなかで、透谷は自由民権運動に直接参加した唯一の文学者として、真に独創的な思想活動をつづけていった。

時に我がためにこの幻境を備え、わがためにこの幻境の同住をなせしものは、相州の一孤客大矢蒼海（蒼海大矢正夫は相模國へ神奈川県へ出身の小学校助教員で、透谷より五歳の年長者。八王子地方の自由民権運動にたずさわつて、のち自由党大阪事件に連坐なり）。

はじめてこの幻境に入りし時、蒼海は一田家に寄寓せり、再び往きし時に、彼は一畸人の家に寓せり、我を駐めて共に居らしめ、我を酔わしむるに濁酒あり、我を歌わしむるに破琴あり、縦に我を泣かしめ、縦に我を笑わしめ、我素性を枉げしめず、我をして我疎狂（大まかで氣ちがいじみている性格）を知るは独り彼のみ、との歎を發せしめぬ。おもむろに庭樹を敲めて奇句を吐かんとするものはこの家の老畸人（自由民権運動の老政客秋山田三郎。俳号を竜子といい、相当な豪農で刀剣を収集し、居合ひ抜きが得意であつたと伝えられる）、劍を撫し時事を慨うるものは蒼海、天を仰ぎ流星を数うるものは我れ、この三箇一室に同臥同起して、玉兎幾度か輝け、幾度か満ちし「玉兎」月の中にいるといううさぎ。転じて月の別名。「玉兎幾度か輝け……」で幾月かそこにいたことになる）。

三たび我が行きし時に、蒼海は幾多の少年壮士を率いて朝鮮の學に与らんとし（明治十八年、自由党左派の大

井憲太郎らが朝鮮に改革のクーデターを起こそうと企てたことを指す）、老畸人もまた各国の点取（連歌、俳諧などで評点の優劣を争ふこと）に雷名を轟かしたる秀逸の吟咏を膺して、自村の興廢に関わるべき大事に眉をひそむるを見たり。この時に至りて我は既に政界の醜状を惡くむの念漸く専らにして、利劍を把つて義友と事を共にするの志よりも、静かに白雲を趁うて千峰万峰を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失うの悲しみは胸に余りしかども、私かに我が去就を紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。この第三回の行、われは髪を剃り節を曳きて古人の跡を蹈み、自から意向を定めてありしかば義友も遂に我に迫らず、遂に大阪の義獄に与らざりしも、我が懷疑の所見朋友を失いしによりて大に増進し、この後幾多の苦獄を経歷したるはまた是非もなし。

狂いに狂ひし頑癖も稍静まりて、故年（明治二十五年。この年、透谷は数え年二十五歳を迎えた）人間生涯の五合目の中阪にたゆたいつつ、そぞろに旧事を追想し、帰心矢の如しと言いたげなるこの幻境に再遊の心は、この春松島に遊びし時より衷裡（心のうち）を離れず。幸にして大阪の事ありてより消息絶えて久しき蒼海も、獄を出でて近里に棲めば、書を飛ばして三個同遊せん

ことを慫慂するに、来月まで待つべしとの来書なり。我は一日を千秋と数えて今日まで待ちつるものを、今更に閑暇を得ながら行くべきところに行かぬは、あさはかな心の虫の焦つを抑えかねて、一書を急飛し、飄然家を出でて彼幻境に向いたるは去月二十七日。

この境、都を距ること遠からず、むかし行きたる時には幾度か鞋の紐をゆいほどきしけるが、今は汽笛一声新宿を発して、名にしおう玉川の砧(きぬいた)へ衣板のつづまった語。槌で布を打ちやわらげるのに用いる木またはその石の台。それを打つことをもう)の音も耳には入らで、旅人の行きなやむという小仏の峯(小仏峠)に近きところより右に折れて、数里の山径もむかしにあらで腕車(うでぐるま)のかけ声すさまじく、月のなき桑野原、七年の夢を現にくりかえして、幻境に着きたる頃は夜も既に十時と聞きて驚ろきたり。この幻境の名は川口村字森下、訪う人あらば俳号竜子と尋ねて、我が老畸人を音づれよかし。

龍子は当年六十五歳、元と豪族に生れしが少うして各地に飄遊し、好むところに従いて義太夫語りとなり、江都に数多き太夫の中にも寄席に出では常に二枚目を語りしとぞ。然れども彼は元来一個の俠骨男子、芸人の卑下なる根性を有たぬが自慢なれば、あたらしき

才芸を自ら埋没して、中年家に帰り父祖の産を継ぎたりしかど、生得の奇骨は鋤耜(すき)に転じて農業をいうに用ゆべきにあらず、再三再四家を出でて豪俠を以て自から任じ、業は学ばずして頭領株の一人となり、墨つば(大工などが直線を引くのに用いる道具)取つてはその道の達人を驚かしめ、風流の遊場に立ちては幾多の佳人を悩殺して今に懺悔の種を残し、ある時は剣を挺して武人の暴横に当り、危道を踏み死地に陥りしこと数を知らず。然れども我が知りてよりの彼は、沈靜なる硬漢、風流なる田人、園芸をわきまえ、俳道に明らかに、義太夫の節に巧みに、刀剣の鑑定にぬきんで、村内の葛藤を調理するに威権ある二十貫男、むかし三段目の角力を悩ませし腕力たしかに見えたり。

わが幻境は彼あるによりて幻境なりしなり。わが再遊を試みたるも寔に彼を見んが為なりしなり。我性尤も俠骨を愛す。而して今日の社界まことの俠骨を容るるの地なくして、剽軽なる壮士のみ時を得顔に跳躍せり。昨日の一壮士、奇遇に遭会し代議士の榮譽を荷いて議場に登るや、酒肉足りて脾下(脾は脾臓)見苦しく肥ゆるもの多し、われはこの輩に会う毎に嘔吐を催うすの感あり。世に知られず人に重んぜられざるも胸中に万里の風月を蓄え、綿々余生を養う、この老俠骨に

会わんとする我が得意は、いかばかりなりしぞ。

車を下り閉せし雨戸を叩かんとするに、むかしながらの老婆の声はしわぶきと共に耳朶をうちぬ。次いで少婦の高声を聞きぬ。わが手は戸に触れて音なう声と共に、中には卑や珍客の来遊におどろける言葉を洩らせるものあり。わが音むかしに変らぬか、なつかしきものは往日の知音なり。戸は開かれて我は迎え入れられしが、老畸人の面を見ず、之を問えば八王子にありと言う、八王子ならば車を駆って過ぎり来しものを、この時我は呆然として為すところを知らず。

埋火をかき起して炉辺再びにぎわしく、少婦は我と車夫との為に新飯を炊ぎ、老婆は寝衣のままに我が傍にありて、一枚の蒔団扇に清風をあおりつつ、我が七年の浮沈を問えり。ふところに収めたる当世風の花簪、一世一代の見立にて、安物ながらも江戸の土産と、汗を拭きふき銀座の店にて購いたるものを取出して、昔日の少娘のその時五六歳なりしものの名を呼べば、早や寢床に入れりという、枉げてその顔見せてよと乞えば、やがて出で来りて一礼す。驚かるるまで変りて、その名にしれし年の数もかさなりて、今は十三歳と聞けばなつかしき山百合の、いま幾年たたば人目にかからむなど戯れける中に、老婆は他の小娘の、むかしの

小娘のとしばえ（年かさ、年ごろ、年配）なるものを抱き来りて我を驚ろかせぬ。その名をぬひと呼ぶと聞きて、行先人の妻となりてたちぬいの業に家を修むる吉瑞（めでたいしるし、よいしるし）ありと打ち笑ひぬ。時も移りて我は老婆と少娘との紙帳（紙製のかや）に入りて一宵を過ごしぬ。この夜は七年の刺多き浮世の旅路を忘却し、安らかなる眠りに入りて楽しかりけり。

明くれば早晩、老婆の声を尋ねて鬱叢たる藪林に分け入り、旧日の「我」に歸りて夢幻境中の詩人となり、既往と将来を思いめぐらして、神氣（精神・気分）甚だ爽快なり。老婆は後庭に植えたる百合数株、惜気もなく掘りとりて我が朝餉の膳に供し、その花をば古びたる花瓶に活けて、我が前に置据えぬ。人を市に選りて老畸人に我が来遊を告げしめ、われに許して彼が秘蔵の文庫に入りて、その終生の秘書なる義太夫本を雑抽（か）つてに抽き出す、の意がせしめたり。午になれど老人未だ帰らず、我は人を待つ身のつらさを好まねば、少娘とそが兄なる少年とを携えて、網代と呼べる仙境に陥入れり。網代は山間の一温泉場なり、むかし蒼海と手を携えて爰に遊びし事あり、巖に滴る涓水（したたりの水）に鉦氣ありければ、これを浴室にうつし、薪火をもて暖めつつ、近郷近里の老若男女、春冬の閑

時候に來り遊ぶの便に供せり。一条の山徑草深くして、昨夕の露なお葉上にのこり、衰ぐる裳も湿れがちに、峽々を越えて行けば、昔遊の跡歷々（あきらかなさま）として尋ねべし。老鶯に送迎せられ、溪水に耳奪われやがて砧の音と欺かれて、とある一軒の後ろに出づれば、仙界の老田爺が棒打（回転する棒状の木片を先端につけた道具を用いて脱穀などをする事）とか呼べることをなすにてありけり。ここは網代の村端にて、これより溪澗に沿ひ山一つ登れば、昔し遊びし浴亭、森肅たる叢竹の間にあらわれぬ。この行甚だ楽しからず、蒼海約して未だ來らず、老俠客の面未だ見ず、加るに魚なく肉なく、徒らに浴室内に老女の喧囂（やかましいこと）を聞くのみ。脇を曲げて一睡を貪ほると思ふ間に、夕陽已に西山に傾きたれば、晚蟬（ひぐらしぜみ）の聲に別れてこの桃源（俗世間を離れた別天地）を出で、元の山路に抛らで他の草徑をたどり、我幻境にかえりけり、この時弦月（ゆきはりづき）漸く明らかに、妙想胸に躍り、歩々天外に入るかと覺えたり。

樓上には我を待つ崎人あり、樓下には晚餐の用意にいそがしき老母あり、弦月我幻境を照らして朦朧たる好風景、得も言われず。階を登れば老俠客荒爾として我を迎え、相見て未だ一語を交わさざるに、満堂一種

の清氣盈てり。相見ざる事七年、相見る時に驟かに口を開き難し、斯般（この間の、この場合の、といった意）の趣味、人に語り易からず。始めは問答多からず、相對して相笑うのみなりしが、漸く談じ漸く語りて、我は別後の苦戦を説き起しぬ。

この過去の七年、我が為には一種の牢獄にてありしなり。我は友を持つこと多からざりしに、その友は国事の罪をもつて我を離れ、我もまた孤獨（ひとりもの）の孤獨なもの為すところを失いて、浮世の迷巷に陥み迷いけり。大俗の大雅に雙ぶべきや否やは知らねど、我は憤慨のあまりに書を書り筆を折りて、大俗をもつて一生を送らんとし定めたりし事あり、一転して再び大雅を修めんとしたる時に、産破れ、家廢れて、我が瘦腕をもつて活計の道に奔走するの止むを得ざるに至りし事もあり。わが頑骨を愛して我が犠牲となりし者の為に、半知己の友人を過ちたりし事もあり。修道の一念甚だ危うく、あわや餓鬼道に迷い入らんとせし事もあり、天地の間に生れたるこの身を訝かりて、自殺を企てし事も幾回なりしか、是等の事、今や我が日頃無口の唇頭を洩れて、この老知己に對する懺悔となり、刻のうつるも知らで語りき。

しばらくありて老婆は酒を暖め來りて、飲まずと言

う我一杯を強い、これより談話一転して我幻境の往事に入れり。淡泊洗うが如き孤劍の快男児(蒼海)この席の談笑を共にせざるこそ終生の恨なり。少婦も出て来り、當時の主人なる無口男も席に進みて、あるいは旧時の田花の今は已に寡婦なりしを語り、あるいは近家の興廃浮沈に説き及び、あるいは我が棲むところを問ひなどしつ、この夜の興味は抹すべからざる我生涯の幻夢なるべし。就中、老母は我が元来の虚弱にて学道に底なき湖を渡るを危ぶみて、涙を浮べて我が健全を祈るなど、都に多き知己にも増して我が上を思うの真情、ありがたしと尊うとしとも言わん方なし。

この夜の紙帳は広くして、我と老俠客と枕を並べて臥せり、屋外の流水、夜の沈むに従いて音高く、わが遊魂を巻きて、なお深きいづれかの幻境に流し行きて、われをして睡魔の奴とならしめず。翁もまたねがえりの数に夢幾度かとぎれけん、むく／＼と起きて我を呼び、これより談話俳道の事、戯曲の事に關にして、いつ眠るべしとも知られず。われは眠りの成らぬを水の罪に帰して、

七年を夢に入れとや水の音

と吟みけるに、翁はこれを何とか読み変えて見たり。

翁未だ壮年の勇気を喪われど、生年限りあれば、か

ねて存命に石碑を建つるの志あり、我が来るを待ちて文を属せしめんと(碑文をつくらせよう、の意)の意を陳ければ、我は快よく之を諾しぬ、また彼の多年苦心して集めし義太夫本、我を得て沈滅の憂いなきを喜び、其没後には悉皆(ことごとく、すべて)に我に贈らんと言ひければ、我はその好意に感泣しぬ。翁の秀逸一二を挙げれば、

夢いくつさまして来しぞほととぎす

ここに寝む花の吹雪に埋むまで

なお名吟の数多くあり、我他日、翁の為に輯集の勞を取らんことを期す。この夜、翁の請に応じて即吟、白扇に題したる我句は、

越えて来て又一峯や月のあと

曉天の白むまで眠り得ず、翌朝日開けて起き出でたるは、いつの間にか明方の熟睡に入りたりしと覺ゆ。蒼海遂に來らねば、老俠と我と車を雙べて我幻境の門を出づ、この時老婆は呉々是我再遊の前の如く長からざるべきを請うに、この秋再びと契りて別れたり。行くところは高雄山。同伴はおもしろし、別して月も宵にはあるべし、この夜の清興を思えば、涼風盈ちて車上にあり。

(下)

むかしわれ蒼海と同一に彼幻境に隠れしころ、山に入りて炭焼、薪木樵の業を助くるをこよなき漫興となせしが、またある時は彼家の老婆に破衣を借りて、身をやつしつ炭売車の後に尾きて、この市に出づるをも楽しみき。

斯る無邪氣の労力をもて我はわが胸中に蟠りたる不平を抑えつ、疲れて帰る夜の麦飯の味、今に忘れず、老畸人わが往事を説きて大に笑う時、われは頭を垂れて冥想す。昔日のわが不平、幽鬼（死人のたましい。幽霊、亡霊）の如くにわが背後に立ちて阿々とうち笑う。さもあらばあれ、わがルーソー、ボルテアの輩に欺かれたらず、また新聞紙々面大の小天地に翱翔（とびまわり、さまようさま）して、局促（器量がせまいこと。こせつくさま）たる政治界の傀儡子となり畢ることもなく、己が夙昔（昔から、以前から、の意）の不平は転じて限りなき満足となり、この満足したる眼を以て蛙飛ぶ古池を眺る身となりしこそ、幸いなれ。

余は八王子に一泊するを好まざりしといえども、老人の意見枉げ難く止むことを得ずして、俗気都にも増

せる市塵の中に一夜を過せり。明くれば早曉羈亭（旅館）を出で、馬車に投じて高雄山に向う、この時のわが口占は、

すず風や高雄もうでの朝まだち

路に棲（はたおり）機の付属具、「秤」もおなじの音の高く聞ゆる家ありければ眼を転じて見るに、花の如き少女ありて秤を用ゆること甚だ忙わし、蓬萊曲（明治二十四年作の劇評）の露姫が事を思い出でてなつかしければ、能く面を見んとするに、馬車は行き過ぎてその事かなわず、彼少女が窓の外におもしろき花の咲けるに心づきて、その名を問えば、鋸草なりと言に、少女の風流思いやられて、句一つ読みたれども難あれば載せず。

琵琶滝より流れ落つる水のはとりの茶亭にて馬車に別れ、これより登り三十八丁、というも靈山の路は遠からず。道すがら巢林子（近松門左衛門の号。「治兵衛」は紙屋治兵衛。浄瑠璃「心中天網島」の主人公。「梅川」は『冥途の飛脚』の女主人公）の曲を評しあい、治兵衛梅川などわが老畸人の得意の節おもしろく間拍子とる歩行も苦しからず、蛇の滝をも一見せばやと思ひしが、そこへも下ず巖角に憩て、清々冷々の玄風（おくぶかい趣）を迎え、体静かに心閑にして、冥思を自然の絶奥

に馳せて、いささか平生の煩羅（わすらわしき）を洗う。幽山に登るの興は登りつきたる時にあらず、荒榛（雑木のしげみ）を披き、峭嶂（けわしいがけ）を陟る間にあるなり、榮達は羨むべきにあらず、榮達を得るに至るまでの盤紆（曲折の多いこと）こそ、まことに歛すべきもの（とうとぶべきもの）なるべし。

頂上にのぼりつきたるは真午の頃かとぞ覺えし、憩所の涼台を借り得て、老畸人と共に縦まに睡魔を飽かせ、山鶯の聲に驚かざるまでは天狗と羽を並べて、象外（俗世間を離れた境地）に遊ぶの夢に余念なかりき。

この山に鶯の春いつまでぞ

とはおかねばけながらの句なり。老畸人もまたむかしの豪遊の夢をや繰り返しけん、くさめ一つして起き上たれば、冷水に喉を湿るおし、眺めあかぬ玄境（趣のふかいところ）にいとま乞して山を降りり。

琵琶滝を過ぎ、かねて聞く狂人の様を一見し、かつは己れも平生の風狂（きちがいじみた性格）を療治せばやの願ありければ、折れて其処に下るに、聞きしに違わず男女の狂人の態、見るもなかなかに凄くあわれなり。そが中には家を理するの良妻もあるべく、業に励むの良工もあるべし、恋のもつれに乱れ髪少女もあらむ、逆想（さからう思い、そむこうとする気持）に凝り

て世を忘れたる小ハムレットもあらん。

われを見ていずれより来ませしぞと問いかけたる少年こそは、狂いて未だ日浅き田里の秀才と覺えたり、世間真面目の人、真面目の言を吐かず、却つてこの狂秀才の言語、もつとも真意を吐露すらし。われは極めて狂人に同情を有するものなり、かつて狂者それがしの枕頭にあること三日、己れも之に感染するばかりになりて堪えがたかりし事ありしが、今も我は狂人と共に長く留まる事能わず。琵琶滝はさすがに靈瀑なり、神々しきこの比類多からず、高巖三面を囲んで昼なお暗く、深々として鬼洞に入るの思いあり、いかなる神人ぞ、この上に盤桓（立ち去りがたいさま）してこの琵琶の音をなすや、ここに来てこの瀑にうたれて世に立ち帰る人の多きも、理とこそ覺ゆるなれ、われは迷信とのみ言いて笑うこと能わず。

ここを立ち去りてなお降るに、ひぐらしの声涼しく聞えたれば、

日ぐらしの声の底から岩清水

この夜は山麓の羈亭に一泊し、あくる朝連立て蒼海をその居村に訪い、三個再び百草園に遊びたることあれど、紀行文書きて己れの遊興を得意顔に書き立つること平生好まぬところなれば、ここにて筆を擱しぬ。